

唐月梅

## 『日本詩歌史』

唐月梅『日本詩歌史』（東方文化集成）北京：北京大学出版、二〇一五年

テイエン  
田  
ユアン  
原

## (一)

作者である唐月梅氏の後書きによると、本書を書くきっかけは故人となった夫の葉渭渠氏とともに十年間をかけて四巻の『日本文学史』を共著したときに、唐が演劇と詩歌の部分を担当したことであったという。それから、まだ若い時の一九五〇年代から、国に配属された対外文化交流の仕事に携わって、多くの日本詩人と接触し、親しい付き合いもあったという。原稿用紙で千三百枚余りの本書が、いつから書き始められていつ書き終えられたかは記していない。おそらく相当な年月がかかったに違いない。完成するまで大変な作業であったことは言うまでもないだろう。私の知る限りにおいて、系統的に、文字以前の日本古代民謡から現代

詩まで詩歌史を細かく纏めたのは、中国ではこの『日本詩歌史』以外にはないのではないかと思っている。

詩歌が、おそらくほとんどの国や民族の文学の源であると同時に、あらゆるジャンルの文学の始まりでもあることは疑う余地がないと思う。なぜなら、詩は文字以前に口承文芸の一つとして人類の唇の間に存在したからである。日本と同様に、中国ももちろん、古代ギリシャとローマによる『ホメロス史詩』なども、アラビア語とペルシア語による古代叙事詩も、ノルウェー、デンマーク、スウェーデンに起源しのちにアイスランドにまで流行したエッダとサーガもそうである。

長い時間を費やしてこの本をやつと読み終わつたときに、感無

量だった。おそらく私の読んだ時間より何百倍の時間を費やして、作者は計り知れないほどの本を読み、膨大な資料を集めてこの五百ページの厚くて重みのある本を完成させた。そのことを考えると、唐氏の能力と努力に脱帽するほかない。千数百年あまりの時間を制御して、その長い流れの中で形成した詩歌史を正確に把握することは少数の人にしかできない仕事と思う。『日本詩歌史』は時代順に配列して構成しており、分かりやすい文脈で、各時代の異なるジャンルの詩歌の変遷と進化などについて掘り下げて論じながら、代表的人物と著作について納得できる分析と論述を展開している。

実際、この本が届いてから、本文にたくさん引用されている呪<sup>まじな</sup>い歌、祝詞、短歌、俳句、近現代詩などの中国語訳がとても気になつていった。引用のため本書に登場する多くの詩歌作品の翻訳だけでなく至難の業だと言えるほどだからである。しかし、引用されている民謡と定型詩と自由詩の中国語訳は見事な出来栄えであり、詩としての完成度も高い。これは作者の唐氏にとって当たり前のことと言えるかもしれない。というのも彼女は、一九七〇年代から、よきパートナーである夫の葉渭渠氏とともに日本文学の翻訳者・研究者として活躍し、これまで二人の翻訳した川端康成、横光利一、小林多喜二、三島由紀夫の作品や、『日本文学史序説』、『源氏物語』、『日本文学史』、『日本文学史思潮史』、『

『鬼才三島由紀夫伝』、『谷崎潤一郎伝』などの数え切れないほど多数の著作が、広く知られているのはもちろんのこと、これらの書物が中国人の文学者あるいは研究者にどれほどの影響を与えたかは計り知れない。

## (二)

本書は十九章で構成されている。各章にその時代において詩歌がどういう状況と環境の下で発生したか、その形成した詩歌がそれぞれの時代の時代と外部世界（外国）とどういう関係性、どういう因果関係を構築しているかについて大局的見地から書かれている。古代民謡から、中世と近世の定型詩及び近現代詩にいたるまで、詩歌の発生学に関するいろいろな点から緻密に考察を行つていくことから、この本を読めば日本詩歌発展のプロセスを知ることができる。特に第一章の「日本詩歌の起源」では、出漁、狩猟、農耕、戦<sup>いくさ</sup>、祭祀、葬式などを行うときに自然に人間の口から誕生する歌謡が詩歌の母体であることを、改めて示した。ここで、ふと私が日本に留学する前に当時の中国で流行つていた「ソーラン節」という北海道の日本海岸の民謡を思い出した。最初聞いたときには、歌詞ももちろん分からなかったが、分からなくても、中国で聞いたことのないその旋律は独特で、高らかに響きわたる歌声に感動したことはいまもありありと心の中で響いている。日本に來

てずいぶん日にちが経つてから、「ソーラン節」が後志の積丹半島しりべしが発祥地であることと、ニシン漁の歌として知られていることが分かった。それと対照的に、十数年前、ある国際現代詩シンポジウムで、詩人の高橋睦郎むつおが二十数か国の詩人のために歌った日本古代民謡の歌詞もさっぱり分からなかったが、その悲しそうな低く沈んだ歌声はとても印象的だった。第一章にも書かれているとおり、古代の日本民謡は外来文化と関係なく存在し、つまり中国文明が日本に上陸する前にあったということである。たとえ日本語という文字が誕生しなかったとしても。

第二、三章は、二十巻におよぶ奈良時代の歌集である、日本にとって初めての和歌総集『万葉集』の誕生過程とそのテキストをめぐって論述している。『万葉集』といえば中国の春秋戦国時代に孔子が編集した『詩経』のような存在だが、作品の量は三一一首の『詩経』の十倍以上にわたる、なんと四千五百首あまりで、分類としては五体をもち短歌、長歌、旋頭歌、仏足石歌と連歌がある。千三百年前の奈良時代といえ、ちょうど唐の最盛期である時期だと考えると、遣唐使という文化使節たちの存在が大きい、もつとさかのぼって考えれば、中国の歴史書にいう「倭の五王」の時代、約四世紀から中国、朝鮮半島との交流によって大陸の儒教文化や仏教文化が浸透したことの影響が大きいと言えるかもしれない。『万葉集』に、きわめて少ないとはいえ漢詩があったとい

う事実を考えれば、外部から来た大陸文化の影響は明らかである。この二章は本書においてはとても重要で、中国との影響関係について新たな仮説と問題意識を提示し、反駁のしようのない論拠を探究しながら、論点も視点も新しい。

第四章から第七章までは、まず漢詩文のブームが沸き起こる現象と菅原道真をはじめとする日本の漢詩人について考察している。それから、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑らが編んだ『古今和歌集』の成立とその中に収められた一千百首の和歌について、分析と鑑賞を同時に行い、「雄健でおおらかな」『万葉集』より優美かつ繊細で理知的だと言われた、和歌という日本的なジャンルの在り方、そして和歌の本質についても追究されている。これらの章の中で、空海が唐時代の詩人だけでなく、それ以前の古代詩人たちの書いた詩論を参考した上で作り出した『文鏡秘府論』に対する作者の考察は細かい。ある意味、『文鏡秘府論』の誕生によつて古代日本の詩学と歌学の基準が定められたと言えるだろう。詩学に関する批評意識もこの時代から始まったということは意味が深い。

和漢併存（和歌と漢詩）という時期を経て近世に入ると、新しい時代の流れによる和歌の革新と進化とともに新たな詩体もたらされた。それは狂歌と川柳というジャンルの現れである。それまで、いわゆる日常的な瑣事を題材にする表現をあまりにもしてこ

なかったなかで、俗語を用いて風刺や洒落などを生かして滑稽な短歌が生まれたわけである。しかしさかのぼって考えてみれば、『万葉集』の戯笑歌と『古今和歌集』の俳諧歌からの影響を連想できるし、因果関係を無視できない。この点において、江戸時代に流行し、今の時代にも続いている俗語で表現する川柳ということを考えれば、ある意味で日本文学におけるユーモアの原点の一つだと言っても過言ではないかもしれない。このあたりの指摘と論述も、本書の読み応えがあるところである。

中国の明清時代の交替時期に現われた江戸時代は日本詩歌のルネサンスの一つではないかと、私はずっと思っている。五・七・五という俳句の形は芭蕉の時代には完全には固まっておらず、連歌から俳諧連歌へ、また俳諧連歌から発展しながら俳句に変化したのは芭蕉より後だが、芭蕉はオリジナルな俳風を樹立すると同時に、その革新を起こし俳句の新しい一ページをめくった。芭蕉は中国でいえば李白のような存在で、まるで神に特別に愛され、神に特別な靈感を与えられたような感じがする。芭蕉の俳句に潜む普遍性と深遠さ、そしてどの時代においてもその新しさが保たれたこと、どの言語に訳してもそのポエジーが通用する現象は言葉の表現を超えていると思う。今までの人類の歴史の中で、芭蕉と李白のような詩人はおそらくどの言語にも稀な存在ではないかと思われる。芭蕉の後に登場した、現実と向き合う一茶とロマン

的で画像性の強い俳風を示した蕪村も、明治に俳句の形を定着させた子規なども数多く名句を残したことについて、本書の枠組みを超えるかもしれないが、俳句の世界性に一言触れればもつと良いのではないかと思う。

近代詩の生まれた時期、真つ先に『蓬萊曲』（二八九一）という詩劇を自費出版した北村透谷は日本近代詩の基礎を固め、六年後の一八九七年、その影響をうけて島崎藤村が自分の個人詩集『若菜集』を初めて世に送り出した。このような近代詩集は東アジアにとつて初めての出来事である。もちろん、その以前に出版された訳詩集の『新体詩抄』（二八八二）と『於母影』<sup>おもかげ</sup>（二八八九）が、明治詩人たちに与えた影響は、本書に書かれた通り、大きい。近代詩がどうやって形成されたか、それから後に多くの詩歌流派が誕生する中で、ロマン派や象徴派、プロレタリア派、耽美派などの詩人たちが、どうやって展開していったかについても、細かく論じられている。と同時に、『明星』派のメンバーとして、定型詩と自由詩を跨りどちらにも功績を残して活躍した与謝野晶子と石川啄木についての論述は、印象深いものだった。

戦前戦後の日本現代詩に関しては、宮沢賢治、高村光太郎、西脇順三郎、三好達治、立原道造、中原中也らを中心に論じられている。戦後詩については、主に『荒地』と『列島』派の詩人たちを検証した。一九五〇〜六〇年代に活躍した詩人として大岡信、

飯島耕一、清岡卓行などの詩精神とテキストについて分析しながら、戦後詩の発展軌跡を明らかにし、その必然性と時代的意義を強調した。ほかに『マチネ・ポエティク』、『近代詩苑』、『四季』、『YOU』、『歴程』、『鰐』などの同人誌についても言及しているが、触れるだけにとどまっている。もう一つ少し残念に思ったのは、日本戦後詩の柱のような存在として、五〇年代から今日まで数多くの名作を書き、数十か国で翻訳された、国際的に高く評価された読まれた「国民詩人」谷川俊太郎に触れなかったことである。無意識のうちに見落とされてしまったか、それともともとそういう認識が足りなかったかに関しては、本人に聞かないと確認できないが、本書の成功はささいな欠点で覆い隠されるものではない。とはいえ、最終章として入れるべきものがないのは残念である。

十数年前に作者の唐月梅氏と葉渭渠氏のお宅訪問をしたことがある。書斎で本棚に囲まれたテーブルについて、お茶をついでくださった唐氏の優しい姿は鮮明に覚えている。帰りに二人からサイン入りの本をたくさんいただいたことは、今も幸せに思っている。